



筑紫女学園大学リポジット

Research on the Problem of Modernization in Chinese Minority Groups : Focusing on HuiZu Tribe Community and NiuJie Street in Beijin

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/515 |

中国少数民族における現代化問題の研究

— 北京市「回族」社区「牛街」を中心として —

石 其 琳

Research on the Problem of Modernization in Chinese Minority Groups
— Focusing on HuiZu Tribe Community and NiuJie Street in Beijing

Kirin SEKI

前言

本研究は、中国少数民族の現代化問題についての継続研究である。これまで多くの少数民族自治区をフィールドワークし、現代化問題について研究を行ってきたが、今回は北京市の古い回族居住区「牛街」の成立の歴史背景と都市化についての調査結果である。

回族は、中国国内でイスラム教を信仰する一つの民族集団である。2000年の中国第5回人口調査では回族人口は981.68万人だったが、現在の人口は既に1,000万人を超え、漢族、チワン族に次ぎ、第3の民族である。その分布状況について、中国最多人口の漢族以外に、全国2,000余りの県、市にまたがっているが、特に注目したいのは、全国180万人以上の人口をもつ都市において、少数民族の居住人口のうち、最多数を占めているのが回族である。この現実をみて、回族の都市化程度が高いとも言われている。

「牛街」を研究調査対象にした理由は、古くからこの地区が「回族」の集団的居住地であり、ある意味では、大都市中のマイノリティ的な存在といえる。中国の開放政策を実施して三十年以来、全国各地で都市現代化の潮流に席卷され、1997年10月北京最大の都市計画の危険地区改建項目に、「牛街」という民族特色濃厚な「社区」が対象となり、大規模な改造が始まったのである。本論はこの由緒ある民族社区が現代化推進の政策下、激しく変動する実態と問題点を明らかにし、その環境と住民意識の変化から「牛街」の新たな位置づけと展開を考察する。ここで予備知識として、中国における回族形成の歴史背景、現在の生活実態に関わる回族の出身、言語及び全国に分布する理由を含めて、簡単に触れておく。

第一章 回族の出身源と全国分布の歴史背景

唐代より中国へ流れ続いた大勢のイスラム教徒の原籍は、概ねパミール高原より東のコータン、クチャまで、西の中央アジア、イラン高原アラビア半島の地域である。また唐代の内乱鎮圧のためアラブ地域から派遣された大勢の軍人がその後中国に残留し、さらに海と陸のシルクロードより絶えずにやってきたペルシア商人たちも現在中国回族の一つ大きな源と考えられる。後の元朝成立まで、シルクロードに沿って中国へ流入した回教徒が、どれだけいるかは数えようがないほどだといわれている。十三世紀の元王朝建国後、「回回」と呼ぶイスラム教徒は、当時の全国各省、各州県

のダルガチというモンゴル長官の身近に配属され、元の支配に協力を強いられている。よって全国的に分布するようになり、のちに「回回は天下に遍し」の諺が生まれる訳である。(注1)

モンゴル支配の元王朝は、西域から来華した数十種の民族集団に対し、モンゴル人の次に社会地位の高い「色目人」を置いている。回教徒は色目人の中でも最上階級であり、その上層部は元王朝の政治、財政に重要な役割を果たしたが、下層民は商業、農業で生計を立てている。漢族と混住する中、混血と漢化が進み、話す言葉もペルシア、アラビア、トルコ系の諸言語から中国語（漢語）に変わり、母国語を忘れ、話せなくなったため、現在回族が漢族と区別できるのは、宗教信仰と生活習慣だけになったのである。

現在中国国内には数か所の少数民族自治区があり、行政上回族には「寧夏回族自治区」を設けている。ただし上述のように、回族が全国多くの都市、県に分布しているから、時代における国家と社会の関係の変動に沿って、それぞれ生活する地域で直面する難題も異なる現実がある。一般に回族の個別家族が多人口に占める他民族地区に「散居」する場合、自然に他民族に同化、融合する事実は多く存在する。しかし内地、沿海の大、中都市には、極端な民族孤立の散居環境下、逆に民族の生存危機を抱えながらも、独自の形で民族の特徴を主張する現象がよく見られる。北京「牛街」では、漢族が厄払いのため門に桃木の札を飾る習慣と区別するため、海外のイスラム区域では見られない自宅の門にアラビア文字で書いた「都阿」(注2) (ドア) 札 (写真①) を飾る習慣がある。些細な事例だが、長年「牛街」の存在と変遷過程において、回民たちが潜在的に抱える困惑の深刻さが窺える。以下は、「牛街」における、回族たちの人生と宗教信仰に欠かせない清真寺建設の歴史背景について考察する。



写真① イスラム教の功修、礼俗用語で、儀式など様々な場で使用される(百度百科より)。(2015年10月1日アクセス)

第二章 牛街「清真寺」の成立と職権の流変

牛街の形成歴史を考える際、現在でも回族住民の生活と深く関わる古い清真寺(モスク)(写真②)の存在を知る必要がある。以下はまず牛街清真寺建設の歴史と変遷について触れる。

(一) 牛街「清真寺」の歴史背景

唐代以来イスラム信者が大勢西方から中国へ渡り、宗教と生活のため清真寺を建設、寺を囲居する「蕃坊」を作ったのである。「蕃」は、外国人を指し、「坊」は社区である。元、明時代は、清真寺を中心に「寺坊」という社区が生まれた。

清真寺は、歴代回族居住地域において、宗教と政治、経済、文化教育、民事、社会活動の中心であり、教徒たちの人生及び生活のすべてに関わる存在である。「牛街」もこの背景から都市中に形成された古い社区である。牛街の形成時期を考える際、清真寺の存在が欠かせないため、その建設時期を確定する必要がある。しかしこれまで多くの研究があるにもかかわらず、文献的考証が難しく、定説が定まらないのである。



写真② 2015年筆者が撮影した牛街の清真寺。

現在諸説のうち、宋朝至道2年或いは遼代統和14年(996年)をこの礼拝寺の建成時期と考え、1996年住民たちは、この「宋遼説」を基に、牛街清真寺の千年祝を行ったのである。この説の根拠は、かつて寺に存在した横匾に刻む《古教西來歷代建寺源流碑文総序略》によるものである。そして重要な大辞典《宗教詞典》(1981年版)、《辞海》(1979年版)、《中國回族大詞典》(江蘇古籍出版社1992年版)にもこの説が採用されている。だがこの説に対し、現在寺の東南角にある死後700年経った2人のアラビア学者のお墓があり、墓主のムハモド・アイハモド・ブルタニが回暦679年(1280年)死去、アマドンデ・アリが回暦682年(1283年)死去のアラビア碑文記載を根拠に、この寺は元代初に建ったという。更に、別の学者から同寺内には元代の碑がなく、明代に作った碑しか存在しない事実から、墓は後代倣作であるとの反論がある。現在この寺の建成時期について、定説が困難であるが、研究者の間では少なくとも500年以上の歴史があると考えられている。

(二) 牛街清真寺の職権の変遷

一般にイスラム宗教国家は、宗教法が国法、宗教の指導者は政治の指導者である「掌教制度」がある。しかし中国は非イスラム宗教国家で神権国家ではないため、この点イスラム宗教国家の制度とは異なる。時代と政治制度の移り変わりから、順番に「卡迪(カーディー:裁判官の意味)掌教制」、「伊瑪目(イマーム)掌教制」、「阿訇(バルシャ語Akhundで、もとは教師の意味、経典を熟知する方への尊称)掌教制」、「清真寺管理委員会制度」4つの変遷過程があった。

唐代、宋代では、当時外来イスラム教徒住民地区の「蕃地」において、イスラム法律で管理執行が許された背景から、「卡迪掌教制」が成立し、イスラム法律に詳しい「卡迪」が蕃地の首領となり、この制度は元代まで続いたのである。その後明代では、封建の軟封制度により、清真寺の宗教職人員の宗教と行使権限を強化されたのである。そして「卡迪」が「伊瑪目」にとって代わり、儀式など宗教活動全ての権限が拡大され、寺坊の最高指導者になると同時に、「伊瑪目」の世襲制も成立させたのである。政教合一政策のもと、清真寺の「掌教」は寺務、教権、人権、財権を集中支配であるため、その後権位闘争が絶えずに起っている。この制度は清代末まで続いたのだが、明代中期、宗教経師の胡登洲(1522-1597)が宗教知識と伝教を重視する経堂教育をはじめ、多数の「阿訇」を育成後、各地の寺坊へ派遣して、その結果社区の中堅的存在となり、清末からは民国の「阿訇掌教制」を確立させたのである。そして「阿訇掌教制」の特徴である「阿訇が招聘制」と「宗教職権の集中」の二つの特色から、当時阿訇の重要な位置づけと権威が理解できる。

1951年牛街清真寺も時代の流れに沿って、寺の事務管理を新たに成立した「民族管理委員会」にゆだね、1953年牛街社区で「中国イスラム教協会」が正式に成立させたのである。そして1958年中国政府の全面的宗教改革の実施後、「北京市イスラム教界学習委員会」の成立に伴い、世襲「伊瑪目掌教制」と「阿訇掌教制」が廃除され、寺は「民主管理制度」を進め、阿訇など宗教職の人材は、1955年イスラム教協会創設の「中国伊斯蘭經學院」で育成し、卒業後「阿訇」として全国の清真寺へ派遣される。その後1990年4月牛街清真寺の事務と経済は「宣武区イスラム教協会」に直接管理されることになったのである。唐宋時代から長く続いた掌教制が政教分離政策推進の下で崩壊へ、そして現在まで続く市場開放政策と現代化の進展、清真寺の社区政治中心と権威は完全に消えたのである。「清真寺管理委員会」の成立で、清真寺の寺産もこの管理委員会が管理するのである。1954年より成立した「街道辦事処」と「居民委員会」の地域組織が従来「社区寺坊制」に代わっ

て、住民自治方式で区内のことを管理しているのである。だがこの体制は、回族社区の住民生活にも多くの問題を発生させている、その点について別章で述べる。

第三章 「牛街」社区形成の歴史背景と回族の移住経緯

牛街社区形成の歴史背景を理解するため、まず「牛街」の名称の由来を理解したい。

(一) 「牛街」の名称と社区形成の歴史背景

これまでの研究では、牛街という名称が定着する前に、主に「柳河村」、「岡儿上」、「榴街」、「藁上」、「閣上」、「牛肉胡同」、「礼拜寺街」などがあつた。各名称の由来説も異なり、中で最もよく知られて一般に使用されているのは、「柳河村」、「岡儿上」と現在定着された「牛街」の名称である。そして研究資料によれば、「牛街」が最初に使用された名称は「柳河村」(又は「柳湖村」)であると考えられる。この名称由来の歴史背景について、1153年金王朝4代皇帝の海陵王は、都を燕都(現北京)へ遷移し、都城で大規模の建造工事を行った。園林建設のために、当時城西の西湖(現在の蓮花池)の水を城内へ引き、西から東へ、城内に入ってから南へ流され、現在の牛街地区に水が流れるようになった。だが、「柳河村」の名称についてまた異説がある。他説では、十世紀前の唐末、遼、宋初時期に、永定河中流に位置する北京に南、北、中三つの流れの中、南支流は牛街西南地区の比較的地勢の低い地域を流れるため、連年水浸しの水郷になった故である。他説では、時代を下って金王朝が元に滅亡された後、城が焼き払われ、園林が荒野に、河辺の柳だけが残された。元が都を建て直した後、古い園林は完全に荒野となったため、この名前が付いたというのである。いずれにせよ、「柳河村」の名称に関しては、牛街に水が存在したことは事実であり、現在「呉家橋」の地名も水に関係する事実からして、有力な根拠と考える。

「牛街」の名称が最初に文献に出現したのは、清康熙25年に刊行された《日下旧聞考》である。またこの名称の由来にも諸説がある。研究資料(注3)によれば、概ね以下の三説が有力と考える。その1は、《京師五城坊巷胡同集》に載っている「牛肉胡同」の地名より転化されたという。当時の「牛肉胡同」は現在の牛街を指し、そしてこの地域の回族住民の食習慣は牛肉、羊肉と深く関連し、それで生計を立てているから「牛街」と呼ぶようになった。その2は、この地区では多くの石榴(西域から伝来の木)が植えられているので、「榴街」と呼ばれたのだが、のちに「榴」(liu)の音が「牛」(niu)音に訛ったのである。その3について、その1と2の説をまとめたような考え方である。回族住民は、棗の木と石榴の木を好んで多数栽培しているから、自然に東西向きの道を「棗林街」(注4)と呼ばれ、南北向きの街は「榴街」と呼ぶようになった。時間を経つにつれ、回族の住民たちの生活習慣に牛と羊が不可欠である背景により、「榴街」が「牛街」に訛って定着したという。

以上述べてきた内容から「牛街」名称の由来は確定できないが、清代より現在まで、「牛街」の名称が定着されたことは、長い歴史の変動の視点から、どの説を見ても、現在までこの地域住民の生活実態がある程度反映されていると考えてよい。

(二) 「牛街」回族住民の由来

《中国伊斯兰教の歴史發展和現状》によれば、北京の回族は主に元代由来で、明代になって、当時既に帰化した多数の回族が中国各地から北京へ、また現地駐軍していた回族も北京に留まったと記している。だが別に牛街住民の間、自分達の祖先は、燕王(のちに明の成祖朱棣1402より在位22年)

北征時に追隨して来たとの説がある。《北京牛街志書－岡志》にもそれに相応する記載がみられ、今燕都（現北京）の回民たちの出身は、多くは江南、山東二省からだという。その理由は、燕王の國護衛軍僚はこの二つの地域出身が多いからである。朱棣（明成祖1360-1424）はかつて、現在の北京に「燕王」として冊立され、南京から北上し、大勢の回族護衛軍僚とその家族は、燕王について北京へ移住してきたのである。彼らが牛街住民の祖先である名残として、中には幾つかの家族の称号もこの歴史事実を反映している。例えば現在もある「門刘家」は、自称南京の「水西門刘家」が源である。また「大順堂梁家」（現在牛街には「大順堂食府」という老舗がある）「大順府」の商号は、先祖が朱棣の隨軍コックだったために賜ったということである。

（三）「牛街」社区回族住民の移住経緯

牛街回族住民移住の経緯について、元代都城の大都（北京）を建てた後、国の命令により、新城城内へ居住できるのは、富人と官職に仕える者に限定され、平民百姓の居住区は当時牛街のような城外の郷野地だったのである。明代嘉靖23年（1544年）には都城安全のため、外城を建て、牛街地区も圏内に囲まれたのであるが、上述《岡志》によると、宣武門西南は地勢が高く、「岡儿上」（丘の上）と呼ばれ、教人（イスラム教徒）数十軒の住民は、屠夫行商業者が多かったのである。官職に勤める上層教徒たちは、城内東西「両辺」の優等地に住んでいた。明代滅亡後、「満族」である清朝政府は、「非満族」の住民たちを城外へ追放し、もとの「両辺」に住む教民も住処を失い「岡儿上」へ集まったのだ。「藁上」、「閣上」の名前はその音に訛った呼び方だと考えられている。時代の移り変わりで、もと辺鄙な郷野地が住民の増加の結果、現在のような賑やかな繁華街に変わったのである。この歴史の流れを見れば、「牛街」社区は、歴代王朝の権威に翻弄されながら形成されたのである。

さて、現在の牛街回族社区住民の構成状況を見よう。中国の首都北京は、16個市轄区と2個の県を含む。中には東城区（旧崇文区を含む）、西城区（旧宣武区を含む）（注5）の区域は、伝統的内城の区と考える。西城区には15個の行政区画の办事处が設けられている。「牛街街道办事处（区役所）」がその一つで、牛街の面積は1.41km²である。西城区に32の居委会有るが、牛街の回族は、主に白広路東と教子胡同西にある「牛街」と「輸入胡同」、「教子胡同」、「麻刀胡同」、「小寺街胡同」、「牛街四條」、「糖房胡同」、「棗林斜街」など11個の居民管理委員会の管轄内に集中している。2000年中国人口調査資料によれば、この区域内には、漢族だけではなく、満族、モンゴル族、チベット族、ウイグル族、苗族、チワン族、朝鮮族、ヤオ族、カザフ族、東郷族、キルギス族など約22の少数民族が混住しているが、中でも回族の人口が9割以上を占めている。だが、この回族社区は、1997年10月に始まった大規模な都市計画政策により、全体を建て直されたのである。以来、住民人口流動の実態もかなり変化が見られ、回族住民の暮らしの多方面において、影響をもたらしたのである。以下は都市計画の実施における、牛街社区変化の実態とその問題点を考察する。

第四章 「牛街」社区都市計画の実施

牛街が以前区画されていた宣武区とは、北京の古い城区であり、面積が狭い割に人口密度が高い。さらに明、清時代から続く古い家屋も多く、都市インフラなども整備不足のため、北京の首都建設に合わせて、歴史文化要素の深い牛街も都市計画に加わったのである。

1997年10月、北京市最大規模の牛街改造第一期計画工事が開始された。この改造工事は東に教子胡同、西は白広路、南に輸入胡同、牛街四条、北は広安門内大街がその範囲である。東西二区に分画され、敷地面積35.9ヘクタール、企画できる面積26.99ヘクタールと市政府の代徴収地6.5ヘクタールがある。この改造計画の第一期工事は、工事関係で遷移が必要な住民約7,500戸、2.6万人。そのうち回族または多民族戸が半分を占めている。解体企業175社、解体する古屋面積25万ヘクタール。第一期改造工事で2000年末竣工までに、14棟のタワービルと一棟の多層建物が完成され、3,500戸の住民（回族居民を含む）で、そのうち97%の住民が戻ったのである。

牛街の改造工事企画は、清真寺を中心に周りに高層ビルを建てることである。北に広安門内大街の建物の高さは60mから65m、東側と西側牛街に隣接する公共建物は50mから55m、南側は50mである。牛街本来は社区南北貫通の道幅7.2mの主要道路だったが、2002年5月には延長670m、幅70mの4車線の大通りに改修された。他に牛街と交差する東西方向の小胡同の道路も拡幅された結果、区内と周辺交通状況が大幅に改善されたのである。道路工事と同時に新社区地域の上下水道、天然ガス、通信ケーブルなど現代化関連のインフラも整備されたのである。「牛街街道工委办事处」の新聞《今日牛街》（2005年6月）によれば、2005年第2期工事完了後、約5万人住民の居住条件が改善され、インフラの整備はもとより、「回民医院」の拡張工事、敬老院と社区卫生所、図書館、市民サークルなどの公共施設も新設され、この時点では2,490戸が牛街へ遷返したという。

第五章 牛街街道《民族知識》宣伝冊子の発行

牛街社区改修工事の実施から現在まで、すでに10年の年月を経たのだが、その間、牛街回族住民の生活にさまざまな影響を与えている。以下は筆者の調査写真をふまえて問題点を提起したい。この章ではまず「牛街街道工委办事处」が発行した「民族知識」に関する宣伝冊子の内容を基に、その発行する背景と問題点を考察する。

（一）「民族知識」宣伝冊子の発行背景と目的

「牛街街道工委办事处」より発行された《牛街街道民族知識》宣伝冊子（2014年版）は、新牛街大通りの風景が表紙の折り込み冊子（写真③）である。「牛街街道少数民族流動人口調研報告」（中国國家民族事務委員會2010年6月24日HP）によれば、近年北京市内の流動人口が大量に増加し、經濟建設と社会發展に重要な力になっている。牛街は市内で最も民族特色ある社区の一つであり、27の民族が混住する現実から、流動人口の住民が牛街の特徴をいち早く理解でき、民族社区の平和共存を促進するため、講座、相談コーナーの設置、報告会など多様な活動を行っている。この冊子は2万冊が印刷され、社区で配布されている。回族以外の住民が牛街の特色ある生活環境に適応し、社区内住民の相互理解、包容できるための教育と宣伝活動の一環として制作されたという。

（二）「民族知識」宣伝冊子の内容

この冊子には「民族政策」と「回族習俗と生活習慣」の二部分を設けている。他には公共の応急



写真③ 牛街街道《民族知識》宣伝冊子の表紙（右）と最後のページ（左）。

服務電話番号、「牛街街道办事处」、「回民医院」など多くの公共サービス部署の所在地と電話番号の一覧、そして牛街の清真関連商店が多数紹介され、スーパー、レストラン、牛羊鮮肉販売店などの住所電話番号が記載されている。全体的に「民族政策」が1ページで、そのほか3ページは全て回族宗教と生活習慣に関する内容である。この内容の配分から牛街社区居民における、生活習慣問題の重要性と深刻さが示唆されている。以下は上述2項目の内容を踏まえて問題点を考察する。

まず「民族政策」について、8項目の内容が書かれ、政府の各民族一律平等、各民族の風俗習慣を尊重し、民族差別、民族団結を破壊する行為を禁止する、各民族は自己の民族風習を改革する自由があるなど一般的政策内容を述べている。これ以外に注目する2項目の内容がある。

その1:「三個離不開」というスローガンについての説明に「漢族は少数民族を離れられないし、少数民族も漢族を離れられない、また各少数民族同士も離れられない」と説明し、各少数民族の相互依存と共生の重要性を訴えている。また少数民族に対し侮辱、差別の称号、地名、看板などの設置は禁止する。

その2:清真食品生産、加工、経営場所は必ず区、県民族事務部門を登記して、審査後、初めて市民族事務行政部門統一発行の清真専用標示を掛けることができる。そしてこの標示は他人に転讓、貸出、売買、借用などは禁止する。ホテル及び公共活動場所は、民族風習を理由に少数民族の利用を拒否することは禁止するなどの規定が記している。

次は、冊子に最も多く書かれた「回族習俗と生活習慣」の内容を見よう。冒頭に中国でイスラム宗教信仰の10個少数民族を明示し、そして清真寺の業務内容、回族の祭日活動の習慣についての紹介、回族住居と服装の特徴を説明している。最も注目したいのは、重点的に回族の食文化関連の特徴を紹介しながら、非イスラム住民が回族住民に対する心遣いと注意を呼びかけている点である。

この冊子は教育宣伝を目的とし、区内の流動人口を対象にしているようだが、実際牛街の都市計画改造後、この社区の生活環境が大きく転化した故に、流動人口だけではなく、新たな住宅事情より、社区住民構成に大きく変化をもたらせたことが、この冊子制作の深い起因であると考えられる。又冊子の注意事項に触れた回族の生活習慣は、実際に社区の発展から生じる、さまざまな現実問題に関係することもうかがえる。以下その点についての考察である。

(三) 牛街住民構成の変化と問題

基本的に回族住民の多くは、改修後も牛街のイスラム生活環境の便利さを理由に、牛街へ戻りたいと希望している。だが困難の現実に直面する回族住民も多く存在する。以前より牛街は、北京市内経済文化低迷の地域で、回族の生活レベルも相対的に低い、彼らの職業も歴史背景と信仰を理由に、商業貿易、飲食、町工場など教養文化素質を高く要求しない職業に従事することが多く、部分的な経済能力がない回族住民は、政府から様々な優遇政策と資金補助の方案があつたにもかかわらず、建て替え後、宗教生活に不便だが、牛街で家を購入できないので、他の住宅価額の安いところへ転出しなければならない事態が多く発生している。このように部分的な回族住民が帰住していない、そして建て替えの際、建設費用の収支を調整する必要があるため、住宅戸数を大量に増加させたのである。住宅商品として販売する結果、他の地域から新たにイスラム宗教信仰の少数民族および漢族と非イスラムの少数民族の大量遷入が発生するのである。住宅は高層ビルで、概ね回族住民は集中居住しているようだが、現実に各民族の混住状態は避けられないのである。高層ビルでの生活形態は、回族たちの習俗が守りにくくなるのも事実である。特に食生活の面に関して、その困難度

が増している。例えば豚肉を食する漢民族と同棟に住むことにもなれば、日常生活で、互いに買い物帰りで豚肉を買った漢族と住居共用スペースの場所で顔を合わせることも可能であり、漢族家庭が豚肉料理をする時の匂いが自宅まで流れ込むことも阻止できないのである。実際このようなことが起因で、回族住民が困惑する事例は少なくないのである。

「民族知識」の冊子に、牛街社区の常住人口5.4万人の内、回族は1.2万人で全住民の23%と記している。回族住民の実数が少なくなり、外部からの住民が大量に入居している現状において、私は2015年の調査で、牛街の商店、スーパーなどに勤める多数の店員に質問したところ、ほぼ全員が漢族で、「ここ牛街に回族はそんなたくさんいないのよ」と、ある店員から指摘されたのである。また新鮮牛、羊肉を販売する商店にも問うたが、店員の全てが回族であっても、もともと牛街に住む回族ではなく、ほぼ河北省、甘肅省、陝西省などから出稼ぎの流動人口であった。彼らがもう現在牛街の発展に欠かせない重要な「住民」であることは否定できないである。さらに冊子発行の「牛街街道办事处」の職員は数十人いるが、同2015年私が数か所の区政府関係部署へ尋ねたところ、職員の多数が回族ではないのが現状である。その対策として、区政府は、毎年新人職員に対し、牛街特有の「三入門」教育制度が設けられ、以下①政府の民族宗教教育政策②牛街社区状況③少数民族風習を尊重する三つの入門教育を受ける必要がある。これらの現実からは、ある程度牛街の人口構成の実態の一側面が明らかにされたといえよう。

第六章 牛街民族特色社区政策の展開と問題

区政府は回族の人口が全住民の半数以下の事実に対し、牛街社区が回族中心の地位、特色も弱体化されることを避けるため、区政府は2003年に「牛街民族特色街区」の政策を通過し、牛街社区街道の回族特色建設を生活に関連する内側と街道外観の両方面から計画し実行し始めたのである。ここでまず清真寺の新たな取り込みと街道外観について触れてみる。

(一) 牛街清真寺の新たな位置づけ

清真寺は礼拝場所であり、同時に社区住民生活の中心的存在である。中国歴史上、最初の回民小学校が1908年牛街で創設されて以来、社区住民の教育の中心になり、現在も続いている。のちに宗教と教育の分離政策が行われたが、この地区の回族の教育レベルが高くなったのは事実である。そして宗教活動と文化伝承の他に、1980年10月9日より牛街清真寺は、正式に入場料を徴収する一般開放を始め、寺内に民族用品販売の商店も設けている。1988年同寺は、「全国重点文物保护单位」と認定され、外務省と北京市政府から世界イスラム国家貴賓接待機関と決められたのである。さらに1992年には観光局の推薦より対外観光開放地となり、以来世界的知名度の高い観光名所になったのである。現在寺内には開放スペースの制限がある以外、見学者入寺の際の服装に関する、上述冊子と同じ内容の注意事項の表示板を立てている（写真④）。現在宗教活動と文化の伝承から、牛街清真寺は、社区住民の礼拝寺から民族特色施設の一つとして、新たな位置づけに加わられたのである。



写真④ 清真寺内に立てた看板は「短パンとスカートの着用は入寺禁止」と明記している。
(筆者より)

中国の経済発展により、毎年の聖地メッカ巡礼参加の人数が増加し続けている。以前には巡礼の団体は新疆ウルムチからの出発以外、全員北京牛街へ集合してメッカへ出発している。近年巡礼参加の人数が増えたのと航空便増加の便利さにより、蘭州からも出発できるようになっている。2015年の調査では、全国各地から牛街清真寺へ集まった信者に会ったのである(写真⑤)。全員この牛街清真寺での礼拝後に北京より出発するのであるが、数千人が同時期に牛街へ出回るため、現地の公安局は警備と安全管理を強化している。毎年の巡礼団体の牛街での宿泊、飲食、買い物、交通などは、牛街の経済効果を高めているのが実情である。



写真⑤ 牛街に陝西省からメッカ巡礼への回族たち、赤い鞆に出身地名の表記がある。(筆者より)

(二) 牛街民族商業施設の開発

現代化された牛街は、イスラム宗教活動の重要地区だけに限らず、すでに全国的、世界的にも有名になっている。イスラム風情を出すため、清真寺の修繕のほか、住宅を高層ビルに建て替える際、建物の外観にイスラム風アーチのデザイン(写真⑥)を取り入れている。区政府は、民族特色優遇経済政策をもとに、回族住民生活のニーズを満足できるよう、牛街街道の東西両側を商業施設のビル2階と6階を使用して、民族特色ある商店街を開設したのである。



写真⑥ 左右二つ高層ビル住宅の上の階にイスラム風のアーチのデザインが見える。またビル前牛街の大通りに面した民族絵の看板に「民族団結大家族」の標語がみえる。(筆者より)

牛街の都市化は、古い町の街道から大通りに変わったため、もと牛街で飲食業を営む屋台など民族伝統食の小売店は、営業停止または移転することを強いられたのである。区政府は、牛街回族住民飲食問題の需要と商機の展開、また回族住民の就業機会に配慮して、上述「牛街民族特色街区」が考案され、2003年より実施し続けたのである。現在は「民族知識」冊子にも紹介されたイスラム教の「清真特色」がある「大順堂」、「天客來」、「鴻順軒」、「吐魯番」などのレストラン、「正徳興茶莊」、「聚宝源」鍋料理店と新鮮牛羊肉直販店などの老舗も開店して大変な賑わいをみせている。

牛街回族住民が都市化後、清真生活用品の入手が不便になったため、漢族の平氏が清真関連商品を主に、一般生活用品などを販売する清真スーパーを考案し、2003年1月に営業面積2,400ヘクタールある中国第一号清真専門スーパーを開業している。純正の清真スーパーとして、北京だけではなく全国的にも有名になり、その2階には清真食品専売のフードコートも営業している(写真⑦)。以下は、牛街の商業経営の現実とその問題を考察する。



写真⑦ 「牛街清真スーパーの2階にあるフードコートに各地の回族名物料理を売っている。(筆者より)

(三) 回族の飲食習慣に関わる問題

民族の特色といえば、回族の服装、住居など外見的イメージと清真寺に関わる多数のイスラム宗教活動のほか、最も重要視せねばならないのは、回族が持つ特別な飲食習慣である

う。以前、回族住民が牛街に集団的居住する理由と背景には、住民構成の単純性により、イスラム的生活環境が守りやすい理由があったのである。従来牛街には、回族の飲食習慣に欠かせない牛羊肉など関連の従業者が多く、食材の入手が便利だけではなく、また特別な屠殺法は、イスラムの禁則を厳守できるため、肉の品質管理も信頼できたのである。だが牛街の都市計画実施後、回族の集団居住状況が大きく変化した結果、イスラム的風情および社区生活環境の整備と便利さが増すと同時に、閉鎖的社会から開放的かつ繁華街へ変身した新牛街社区において、実際彼ら自身も新たに直面し、葛藤し続ける多くの問題が生じている。ここでは特に厳しい飲食に関する問題をとりあげる。

区政府は既に1996年牛街飲食業の施行について、新たに規定を發布している。法案の内容で特に重要視するのは概ね以下の3点である。

- ① 全ての清真食品と飲食業に対して検査制度を実施し、審査機構から合格の食品に対し統一の「清真食品標誌」を配布し、営業許可証を発行する。
- ② 清真飲食専門業者のオーナーまたは責任者は必ず回族が一名いることを義務付けられている。管理職は回族に限定し、回族従業員は25%が条件（牛街以外の地域からの者は現地公安機関の証明が必要）、個人清真飲食店の場合、買い出しとコックは回族に限定する。
- ③ 商品の仕入れ専用器具買い出人員について、厳格な基準が定められている。飲食店に勤める非イスラム人員について、少数民族の生活習慣に配慮し、回族にタブー視されている食品は職場へ持ち込むことを禁止する。

上述3点の規定を踏まえて、現在牛街の商業経営の現実問題をみよう。

中国各地に清真飲食店はあるが、一般にオーナーとコックがイスラム信者または回族でなければならず、店員も半分以上が回族と決められているところが多い。2015年牛街での現地調査中、数軒の清真飲食店の店員たちに訊ねたところ、やはり清真料理を専門に扱う店の場合、第四章で触れたスーパーと違って全員が回族であり、ほとんどが牛街以外の地域から出稼ぎに来た回族であった。また「牛街清真スーパー」と2階のフードコートの店舗では、蘭州、新疆などイスラム信者が多い地域の清真料理の名物(写真⑧)を売りにしている。そして顧客は、回族だけが対象ではない現実から、牛街民族社区が潜在的に抱える問題の起因になっている。その深刻な問題とは、この社区での「酒」と「たばこ」の販売である。



写真⑧ 営業の多様化から「牛街清真スーパー」にイスラム教信仰地区「新疆特产」販売の看板がある。(筆者より)

酒とたばこは、イスラム信者の禁物である。しかし、牛街社区の都市化後、昔のような閉鎖的社会から完全に開放され、観光名所として知名度も高まり、事実上、回族だけの社区ではなくなったのである。多民族が混住となり、全国や世界各地から誰でも自由に牛街が出入りできるようになったのである。今回の調査中、有名な老舗「聚宝源」鍋料理店では、開店前から店前の広い歩道を埋め尽くすほど、観光客を含む大勢の顧客が押し寄せている光景を目にしたのである。この現象は、現在牛街の現実の一側面を表しているであろう。そこで生計をたてるため、外部からの顧客の需要を満たすことを考慮し、店によっては、酒とたばこを売ることもあり、現在北京の有名な酒の専門店も開業している。牛街スーパーの開業後には、酒の販売で批判の声もあったため、店では酒売り場をスーパー奥の一角に移して、現在も販売を続けている。

実際このような実態は、牛街に限る問題ではないのである。他のイスラム信仰地域も経済発展のため、顧客を確保し生計を立てることを理由に、宗教への忠実心が動揺させられ、自粛できなくなったケースが多いようである。そして利益を優先させる傾向が多発し、このような実態を対象に、回族からの反発がないわけではないが、イスラム関連のウェブサイトではこの現状を批判し、「清真の精神を守れ」と呼びかけている文章も見られる（注6）。しかし経済効果を優先的に考え、現在牛街に住む回族たちの生活が都市化され、営業形態の多くは、都市化とともに大衆化へと展開する傾向が見られ、イスラムの風習を厳粛に守ることも、世代間に格差がみられている。生活が豊かになり、閉鎖的社会へ逆戻りできない矛盾と現実から、現状を改善するのは、牛街が直面する最も困難の問題ではないかと考える。

（四） 居住空間の現代化の影響と問題

牛街の都市計画には、二つの重要なポイントがあり、それは回族住民の住宅環境の改善と同時に回族の民俗特色を維持することである。中国少数民族が居住する地域において、その伝統生活の特色を維持、主張するため、中国各地の少数民族が多い地区によくみられる構想とは、その民族の伝統的生活風俗を実演できる特定な「場所」を建設するのである。以前、筆者は寧夏回族自治区の銀川市にある居住型の回族民俗村へ調査に行ったことがある。この村の敷地面積が48,000㎡、住宅70棟、建築面積17,800㎡の初の民俗村がクウェート、アラブ首長国連邦からの寄付も受けて建設されたのである。イスラム民俗村の建物は統一計画、設計、施工を行い、現代的緑化、給排水、天然ガスなどのインフラを整備している。建造物はイスラムの建築芸術の特色を反映し、イスラム文化の内容を主とし、回族の生活習慣や民族の風格を取り入れ、回族の人たちが入居している（注7）。この民俗村は、漢族の住民が回族よりも多い銀川市に、民族文化の伝承と観光効果を高める存在価値を担っている。立派な回族風の家は牛街の高層ビル住宅の気風と全く異なっている。民俗村は整然な「民俗文化展示場」である一方、ある意味で、牛街は世界各都市にあるチャイナタウン的性格の存在といえる。両者とも現代化した「社区」だが、牛街と民俗村の最大な違いは、それぞれの「居住空間」が相違する点である。

経済開放のため、多くの政策を急速に推進するなか、特に暮らしと密接に関係ある居住の現代化政策が大規模に行われた結果、全国各地大小の都市に、伝統的居住状況が新しい「社区」形態へとって代わられ定着するのであろうが、この現代化による居住空間の激変は、特に住民の生活意識の面においても多様な影響を与えているのである。

昔の伝統的農業社会では、人々は家族または血縁関係で構築された地域と空間で暮らすのが普通だったが、中華人民共和国建国後の約30年間、都市計画が各地で進展するにもかかわらず、人々の暮らしスタイルと居住空間は、基本的に仕事関係の空間の延伸である。時代的に、まだ多数の国民が国家公務員であるという体制下で、多くの国家機関は、いわゆる「社宅」制度を実施している。近隣と言っても概ね職場の顔見知りの同僚ばかりの族群社会であり、同族群以外の人は勝手に入り込めないのが基本である。しかし80年代以後、開放政策の継続進展により、古い体制の住居が次々ととり壊され、新社区型の住まいが増加している。特に個人の住宅取得が可能になり、社宅に変わって、個人が住宅を購入することで、「家」が「所有物」として自分の財産になったのである。この新しい住まいの形態から、人々の生活には新たな挑戦も始まったのである。それは同じ社区に住むと言っても、近隣には、家族の集合居住による血縁的束縛がなく、また社宅ではないので、同僚で

はなく、上司と部下間の権威的關係も存在しない。全員は一住民としての立場で各自の生計を営み、生活意識と目的が相違するため、時には矛盾や衝突が起ることもある。居住体制の変化は、住居の設計或いは住まい環境施設の整備だけが問題ではなく、重要なのは、住む環境の変化とともに住民たちは、「人間關係の現代化」を迫られるのである。要するに、社區の住民は、民族を問わず、すべて平等であり、個人の尊嚴と利益を守ると同時に、共有する社區群體の利益も守らなければならないのである。現在「牛街社區」の居住空間の変化をみれば、大量戸數の高層ビルが回族の新住宅であり、他民族との混住が必要となるため、同じ宗教の信者でない人たちと居住空間を共有しなければならないのである。民俗村の少数民族は、村の中心的存在であるが、上述第五章三節にも触れたように、牛街社區の場合は、回族は牛街の少数民族の代表であると同時に、牛街社區の住民でもある。それ故に、居住空間の変化から生じる矛盾は、回族の信仰と生活習慣に関わるものが多く占めている現実がある。

終章

今回牛街についての調査は、特に都市化の影響から具体例を踏まえ、重点的に問題点をとり上げたのである。これまで見てきた牛街の歴史的流變では、飲食問題以外に、現代化に伴う教育レベルの向上、次世代の宗教に関する習慣と価値観も時代と政治の激動によって、常に変化をともなってきたのである。また全體的に民族特有な問題として、例えば婚姻に関して、すでに早い時期から異族通婚が始まっている。牛街においても都市の中にある社區の故に、このような事例が特に多くみられる。だが、異族通婚に関しては、家族範囲での価値観を相互理解と妥協が求められる問題であり、周辺住民を巻き込む必要はないのである。このような問題は、いわゆる内的矛盾であり、本論が注目する牛街の都市化問題は、上述の例を挙げた問題の性質と根本的に相違するのである。それは旧「牛街」社區が解体から重建と發展する過程に起因するもので、牛街社區全体に関わる回族住民だけでは処理困難な現実である。

昔日の回族を中心とした閉鎖的、かつ漢族と混住する牛街の住まい状態は、住民間のトラブルがあっても、内的調整と妥協で解決に導かれるが、現在は住まい状態が開放され、社區問題の性質も単純に内的回族中心で解決できる状況ではなくなっている。牛街に關係するビジネスの形態は多様になり、住民も昔より多民族の構成になっている。同じ民族色を出す点でも、上述銀川市の民俗村が回族自治區の一角として展開できる重要な位置を占め、牛街が北京市と一体化された現代化社區の一つである開放的社區であるのに比較すれば、牛街社區の現實は複雑な状態であると言える。

だが、多くの現實問題を抱きながら、今後牛街社區の經濟發展を継続的に實現するには、これまでのように有名になった「牛街」の名の下で、現在の社區がハイブリッド的状况であるからこそ、昔から「回族」の民族特有な象徴的イメージを維持し、強く顯示する必要があると社區住民も共通に認識している。そして、現在この社區が現代化に関わる全ての運営、外觀的環境づくり、また社區新住民を含む共通の利益を守るため、多様の商業ビジネスの開發や區政府が政策的にサポートするなど、各方面から牛街の回族民族特色の強調と定着に協力がみられることも事實である。これは今後「牛街」という回族の「民族特色社區」が、名実ともに長く存続できる道であり、それを推進する潜在的原動力になると考える。

注釈

- 注1 《回教から見た中国》第一章参照。
- 注2 「都阿」は、イスラム教の功修と礼俗用語。アラビア語音訳、「祈祷」の意味。
- 注3 《牛街：一个城市回族社区的变迁》第一章参照。
- 注4 清時代より北京市西城区の一つ胡同である。全長150m幅4 m。1990年代に取り除かれ、現在金宸国際公寓を建てたのである。
- 注5 「宣武区」は2010年政府より撤廃後、現在西城区に規画されたのである。同様に「崇文区」は東城区に入った。
- 注6 「中穆网 论坛」の「主麻共享--清真餐厅售酒的严重后果」より。(选自<伊声>报第47期) 2014年1月16日編集
- 注7 中国通信社2009年7月15日の記事より。

主な参考文献

- 北京牛街 刘东声 刘盛林著 北京出版社 1990
- 牛街：一个城市回族社区的变迁 良警宇著 中央民族大学出版社 2006
- 中国少数民族事典 田畑久夫 金丸良子 新免康 松尾岡正子 索文清 C.ダニエルス著 東京堂出版 2004
- 回教から見た中国 張承志著 中公新書 1993
- 中国穆斯林民居文化 马平 赖存理著 宁夏人民出版社 1996
- 北京牛街志書－岡志 北京市民委古籍办編輯 北京出版社 1990北京
- 北京牛街回族社區的變遷與適應—以一九九七年危改前後為例 胡君華 修士論文 2005 政治大學機構典藏
- 中国伊斯兰教的历史发展和现状 杨启辰 杨华主编 宁夏人民出版社 1999
- 中国回族伊斯兰宗教制度概论 勉维霖 主编 宁夏人民出版社 1999
- 看历史 2015年9月刊 成都日报报业集团
- 中国回族史(上)(下) 邱树森 主编 宁夏人民出版社 1996

(セキ キリン：アジア文化学科 教授)

(本論は2015年度 筑紫女学園大学個人研究助成金による研究成果の一部である)

